



身代わり



それぞれの正義

春日信彦

迷い

夕食後、母親に何か言いたかったが、無言で部屋に戻ると直人は引き出しから取り出した丸坊主の夏美の写真を机の上に置いた。いつものように一人ぼんやりと写真を見つめていたが、今夜は何度もため息をついていた。思い出したように夏美の写真を見る習慣は小学校5年生のときから今の高校1年生まで続いている。そして、すでに自分のやるべきことを決心していたはずだったが、なぜか、心が揺らいでいた。昼間の政代との会話が頭の中をかき乱していたからかもしれない。

今日の昼間、直人は夏休みに入り初めて政代と大濠公園で待ち合わせた。いつものベンチに腰かけソフトクリームを食べながら政代の雄弁を思い出していた。直人にとって異次元の人間に思えた政代との会話は直人の心を次第に変えていった。受験勉強と小児癌のことしか考えたことがなかった直人にとって、政代の社会観はカルチャーショックであった。直人は医者になりたかった。と言うのも、小児癌の子供たちを救いたいと思っていたからだ。

最近、学力と夢に自信を失いかけていた。国立の医学部にいけるほどの学力がないことがわかってきたからだ。中学のころは学年でもトップであったから、なんとなく国立のN大学医学部にいけるような気だった。ところが、5月に行われた校内学力テストで学年順位は450人中30番であった。学区トップのS高校だから、確かに、まだ医学部の可能性はなくもなかったが、なんとなく自信を失ってしまった。しかも、最近では学習意欲が湧いてこなかった。

政代はK大学経済学部志望で学年順位は8番であった。直人にとってこのこともかなりのショックであった。政代の一言、一言が、直人の心に突き刺さっていた。政代は直人よりはるかに大人であった。現実を見つめ社会の利害関係を理解していた。また、将来の仕事においても具体的なビジョンを持っていた。国家公務員総合職試験に合格後、経済産業省に就職し女性就業率向上を図る仕事をやりたいと、明確な志を持っていた。

直人は小児癌に苦しむ子供たちを助けたいとの思いから、医者になりたいと思っていたに過ぎなかった。突きつけられた今の学力と政代の言うアメリカ主導の政治を考えるようになってからは、小児癌に苦しむ子供たちを救うために、いったい何をやるべきかわからなくなっていた。医学を持って子供たちを救うべきか、国家行政にかかわって福祉の面から子供たちを支援すべきか、頭の中は混乱していた。

政代の夢は現実的で、彼女の学力からすれば実現可能と思えた。だが、直人は自分の夢を疑い始めていた。そもそも、小児癌の子供たちを救いたいと思い始めたのは、夏美の闘病生活を目の当たりにしたからであった。もし、夏美と出会わなかったならば、いったいどんな夢を抱いていたのだろうか、と最近思うようになっていた。当然医者になりたいとは思わなかったに違いない。サラリーマン、先生、市役所の職員、フリーター、考えれば考えるほど直人は自分の心がわからなくなっていた。

政代は富国強兵と国民の幸福についてしばしば話す。この話があまりにも説得力があっても直人は圧倒される。話の内容をかいつまんで言えば、世界中の国家は歴史的に富国強兵を推進し発展してきた。富国強兵こそ国家を独立させ、国民を幸せにする。確かに、経済大国を目指せば戦争が起きるが、これは国民のための国家犯罪と言える。2300回以上の核実験や各国の原発事故は死の灰を撒き散らし人類を死滅に追いやるが、この責任は国家にあるのではなく、全人類にある。

まあ、こんな具合で、政代は国会議員のようなことを平然と言う。直人は政治経済のことが良くわからない。と言うより、利害が絡む政治が嫌いなのだ。政治家の話は簡単に言えば、口喧嘩と同じに過ぎない。難しい言葉を使った派閥の詭弁闘争のように思えて気分が悪くなるのだ。代議士がどんなに言い争って予算を組んでも、結局は貧乏人が得をすることはない。いつも、金持ちが得をするような政治が行われている。

TPPは農民を苦しめ、貧乏人が増えるんじゃないかと直人が言ったところ、政代はアメリカに肩を持つようなことを言った。日本はアメリカによって栄えてきたんだから、アメリカが有利になるように協力しなければならない。アメリカが富国化すれば日本も比例して富国化するようになっている。自由貿易共同体を作っていけば核武装もしなくて良くなる。アジア諸国は、できる限りアメリカの州になったほうが、国民は幸せになる。日本が率先してアメリカの州になるべきだ。

この意見には直人も目をむいた。確かに日本は戦後アメリカの庇護の下に繁栄してきたことは確かだが、アメリカの州になって本当に得なのだろうかと思った。さらに、政代が言うには、憲法第条九条「戦争の放棄、軍備及び交戦権の否認」はアメリカとの日米安全保障条約が在って初めて実現するものだから、アメリカあっての日本の平和と言える。世界の武装平和を維持するためにも各国の核実験は必要で、それによる大陸、海、大気の放射性物質による汚染はやむをえない。

すでに、世界は汚染され、今後ますます人類は内部被曝していくから、国家は被爆者のための福祉に力を入れていかなければならない。また、ほとんどの海産物、農産物には放射能が含まれているから、被曝しないための食料確保が特に大切だ。世界各国は一致協力して、アメリカを中心に被曝世界における政治を考えていかなければならない。最初、政代の言っていることは大げさだと思っていたが、考えれば考えるほど政代の考えが正しいように思えてきた。

政代は将来代議士になるんじゃないかと思った。雄弁で闘志がみなぎっている。直人にならない才能だと思った。彼は物静かで人前で話すのは得意ではない。子供のころから一人でコツコツといろんな本を読んで勉強するタイプであった。友達とディスカッションをしたことは一度もなかった。政代と出会って初めて自分の意見を言うようになり、他人の意見に耳を傾けるようになった。

政代のように自分の意見を持った友達はいなかった。周りの友達とはAKB48、ゲーム、スポーツ、部活の話以外したことがなかった。政治経済の話をする友達はいなかった。直人は医者になりたい夢を持っていたが、友達にも両親にも言ったことはなかった。確かに、こつこつ勉強するのは得意だったが、現実に医者になれるとは思っていなかった。夏美との出会いがいつしか医者になることを夢見させていたのだ。

白血病の夏美は小学校4年生のときに長崎から引っ越して西区のM小学校にやってきた。直人と同じクラスでしかもマンションが同じであった。夏美は小学3年生のときに骨髄移植を受け、ほぼ完治した状態であった。だが、小学校5年生のときに再発し、病状が急激に悪化すると突然他界した。そのときから、直人にとって夏美との学校生活は忘れられないものとなった。夏美のことは政代には一切話していない。

11時25分、もうそろそろ政代が現れる予感がした。政代は荒戸のマンションに住んでいて、いつもママチャリでやってくる。ピンクのママチャリが直人めがけて突っ込んできた。「Just in time!」いつもの口癖で笑顔を見せると、スタンドを立てた。直人の横に腰かけると大きな目をむいて肩をぽんと叩いた。「元気だしなよ、最近、暗いよ。サンドイッチ作ってきたから、ハイ」直人にたまごサンドを手渡した。

「9月の実力テストのことを考えていたんだ。君は秀才だから心配ないだろうけど、僕は怖いんだ。順位が落ちたら絶望だよ。どうしよう」ボソツと言い終えるとサンドにかぶりついた。「直人君は理系、文系、どっちにするの？まだ悩んでいるの？」政代は直人の顔を覗き込んだ。「そうだよな、困ったな～、かつこよく医学部志望と言いたいところだけど、今の成績じゃ、無理だし。かといって、他にはつきりした目標もないし。親は国立だったらどこでもいいから、頑張りなさいって言っているけど、いやだ、いやだ、」直人は医学部以外行きたくなかったが、浪人はしたくなかった。

子供のころから勉強は好きだったが、特になりたい職業はなかった。どこかの大学に合格できても成り行きで就職するに違いないと思えた。就職難で公務員になるのも大変だと先生たちも言っていた。親は市役所を勧めているが、市役所も狭き門なのだ。直人はいったい自分はどんな大人になるんだろうと、ぼんやりした不安がいつも頭をめぐっていた。もし、企業に就職できたとしても何のために働くのだろうと思うと、脱力感が全身を襲ってきた。

「少し、悲観的過ぎない、まだ、医学部がだめになったわけじゃないし、いま、あきらめることないんじゃないかな。医学部を目指しなよ。先のことは誰にもわかんないんだから。だけど、直人は医者って柄じゃ、ないようだけどね、どうして医者になりたいの？」政代はなぜ医者にこだわるのか不思議に思っていた。人助けの仕事をしたことはわかっていたが、それだったら医者にこだわらなくてもいいと思った。薬剤師、先生、地方公務員だって人助けになる職業と思えたからだ。

直人はこの質問が一番いやだった。だから、友達にも医者になりたいとは言ったことがなかった。医者になりたいと言ったのは政代が始めてであった。小学校5年生のとき子供心に「将来、僕が医者になって夏美を元気にしてあげる」と密かに誓ったのだった。このことが医者を目指す最大の理由であった。このことは誰にも言いたくなかった。政代にも言うつもりはなかった。小児癌の子供を救いたいとは夏美のことだった。ただそれだけだった。「あ～、小児癌の子供を救いたいんだよ。夢だけど」空を眺めてつぶやくように返事した。

「そ～、癌を治療する薬を開発するのはどう？少しランクを落として薬学部ってのは？」政代は進路の話しに戻した。なぜ、小児癌にこだわるのか不思議に思ったが、身内の誰かが小児癌で亡くなったのではないかと思い、癌についての質問はしないことにした。「薬学部か？確かに、これも一つの方法だな。なるほど」直人は黙り込んでしまった。「ね～、もう、好きな子見つけた？」政代は話を替えて直人を元気付けることにした。

「いや、成績のことで頭がいっぱいだよ。君は？」直人は夏美を失ってから、夏美の思い出が頭になかった。「バスケの大島君、この前、声かけられたの、チョッとイケメンよね」政代はクラス以外の男子からよく声をかけられる。「あ～、あいつか、自信過剰の、成績がいいのはわかるが、人を見下したところがあるからな。俺とは真逆の人間だな」直人はイケメンで自分より成績のいい大島にコンプレックスを持っていた。

「中学の時はいたでしょ。その子とは付き合っていないの？」政代は直人に彼女がいる予感がしていた。「いや、AKBのゆいはんは、好きだけど」直人はもうこれ以上詮索されたくなかった。「そ～う、小学生のときはいたでしょう？」政代は執拗に迫った。「え！女子の友達はいただけどね」政代のしつこさにムカついたが、夏美の顔が一瞬脳裏に浮かんだ。「その子、どんな子？今でも付き合ってるの？」いったい、政代は何を探っているんだろうとムカついたが、変な顔をするさらに追い討ちをかけてきそうでさらりとかわした。

「その子は福岡にはいないよ。長崎に転校したよ」女子の話を打ち切るために嘘をついた。夏美の思い出がよみがえってくると政代がうっとうしくなってきた。政代は直人の 機嫌を察したのか話を替えた。「ね～、これから何しようか？ボーリングやる？」スポーツは苦手であったが、直人は小学生のころからボーリングだけは得意であった。二人は弓道部であったが、親しく話しをするようになったのはボーリングがきっかけであった。政代はチャリで、直人はチャリに追い立てられるようにして西新パレスに到着した。

夏美の幸せ

直人は机の上に置いた丸坊主の夏美の写真をじっと見つめて、あのころのことを思い浮かべていた。小学校5年生になった春に白血病が再発し、夏美は九大病院に入院した。直人は休みの日にはしばしばお見舞いに行った。夏美はクリスチャンで朝夕6時に必ず祈願していた。直人は夏美の話が大好きであった。夏美は神に与えられた命はすべて等しく尊いものだと言って、今生きていることに感謝しなければいけないと直人によく言った。

「元気そうだね、早く退院できるといいね。これ、みんなからの手紙」直人は5年2組全員からの手紙を入れた袋をベッドの上に置いた。夏美は笑顔を見せると袋の中を覗き込んだ。「寝る前に少しずつ読むね、ありがとう。これ、みんなへのお礼の手紙。直人が代表でみんなの前で読んでもいいよ」夏美は目を細めて手渡した。「骨髄移植をしてからとっても調子いいよ、すぐに退院できるかも。早く、みんなと遊びたいな〜」ベッドから飛び降りると大きく背伸びした。

「止めとけよ、まだ、安静にしなくちゃ、必ず、神様が元気な身体にしてくれるよ、それまで我慢しろ」直人は本当に良くなったのか、病院の先生に聞きたい気持ちでいっぱいだった。と言うのも、前回、ほぼ完治したと言われて退院したのだ。にもかかわらず、再発して再入院してしまった。元気な夏美を信用することができなかった。心の中できっと元気になる元気になると何度も自分に言い聞かせた。

怪訝な顔で見つめる直人を見て夏美はつぶやいた。「最近、とても毎日が充実しているの。生きるってことは時間じゃないのね、一瞬を大切にすることだね。すでに、11年間も生きてきたのね、こんなに長く、生かしてくれたのよ。いつ死んでも悔いはないわ。神様、ありがとう。みんなそれぞれ、神様が与えてくれた命と言うものがあるの。長い、短いは幸不幸とはまったく関係ないの。

大切なことは生きている今に感謝することなの。だから、病気と闘っている毎日がとても幸せ。病気の自分に感謝しているの。白血病も神様が与えた一つの幸せなのよ。最初は、病気の自分を不幸と思っていたけど、病気はいろんな大切なことを教えてくれたのよ。もし、元気になったら、いっぱい勉強して、大きくなったら難病と闘っている多くの人たちの力になりたいと思うの。直人もしっかり勉強するんだぞ」夏美はニッコリ笑うと直人の右肩をポンと叩いた。

「なんだか、先生みたいだね。いつの間にそんなに賢くなったんだよ。毎日、本を読んでいるからだな。僕も、負けないように本を読むぞ。よし、僕は将来医者になる。小児癌の子供たちを救って見せる。夏美と競争だ、負けないぞ。指きりげんまんしよう」直人は右手も小指を突出した。夏美も小指を突出し“指きりげんまん、嘘ついたらはりせんぼんの～ます”二人は大きな声で誓いを交わした。

身代わり

翌日、直人は帰りのホームルームでみんなの前で夏美の手紙を読んだ。

～ クラスのみんな、千羽鶴、ありがとう。今は骨髄移植も無事終わってとても元気です。すぐにでも退院したいです。みんなと一緒に遊んだり、勉強したりしたいです。でも、当分は病院でがんばります。病院には同じような病気で苦しんでいる友達がたくさんいます。だけど、みんなとても明るく仲良しです。一緒に遊んだり、勉強したり楽しくやっています。

私の将来の夢は看護師になることです。私を見てくれている看護師さんはとても優しいです。自分もこの人のような優しい看護師になりたいです。看護師さんはしっかり勉強すれば、きっとなれると励ましてくれました。がんばって夢を実現したいです。今度クラスに戻ったとき、一緒に勉強できるように病院でも一生けん命勉強します。これからも仲良くしてください。みんなに会える日はすぐだと思います。～

直人は照れながら読み上げると、大きな拍手が起こった。クラス委員長の悟は僕たちも将来の夢を書いた手紙を夏美に届けようと声を張り上げた。賛成、賛成とみんなの声がクラス中に響き渡った。先生も将来の夢を書くわと尾崎先生も笑顔でみんなの仲間入りをした。直人は夏美の手紙を読んだことが何か手柄を立てたことのように思えた。なんだか、英雄になったような気がして嬉しくて超ハイテンションになってしまった。

帰宅途中、直人の仲良し三人組は夏美のことで話が盛り上がった。いつもは、まっすぐ自宅に帰っていたが、その日は上町に住んでいる雅彦の家によることにした。三人は青信号になると横断歩道を渡り始めた。次の瞬間三人は消えた。居眠り運転のトラックが三人に突っ込んだ。跳ね飛ばされた雅彦と紀夫は肋骨、脚の骨折の重症ではあったが、幸運にも一命を取り留めた。直人は跳ね飛ばされ左腕の骨折だけであったが、右側頭部が電柱に激突した。

手術後、5日間の昏睡状態が続いた。そして、主治医は、現状では植物人間になる恐れがあると説明した。直人は天国へ向かう夢を見始めていた。明かりのない世界に歩き始めていた。それは神が授けた命の終焉を意味していた。直人の魂は夏見の枕元で別れを告げると、暗闇に向かってゆっくりと階段を上っていった。後ろを振り向くと、もはや地上に引き返す階段はなかった。神は直人を天国に引き上げていた。

夏美の魂は悲しい別れの言葉を聞いた。直人の声であった。「僕はまだやりたかったことがあったけど、先に天国に行くよ。夏美、さようなら」

夏美の全身が凍りついた。夏美は自分の命を捨てる決心をした。

～神様、私の命を直人にあげてください。私は11年間幸せでした。小児癌の子供たちを救うために、直人を生かしてください。お願いします、神様。直人、直人、目を覚ますのよ。夏美の声が聞こえないの。直人、直人、起きなさい！直美の笑顔がスパークした～

夏美はすべての涙を流し、神にお願いした。涙が涸れると、夏美は静かに息を引き取った。

奇跡的に眼を覚ました直人は言葉を話すことができた。言語中枢には異常がなかった。3ヶ月の入院後、退院した直人は夏美の死を知らされた。彼女の死は直人が眼を覚ましたその日であった

。

夏美の死から、30年の月日が経った。政代は衆議院議員として、日本が核保有国になれるための憲法第九条の改正案を推進していた。一方、医者となった直人は丸坊主の夏美の写真を腹巻に入れて長崎の病院で小児癌の子供たちを診療していた。